紹介

下坂守著
『中世寺院社会と民衆』
――衆徒と馬借・神人・河原者――

本書の著者下坂守氏は、日本中世の政治・社会に絶大な影響を及ぼした権門である比叡山延暦寺（山門）に関して、重要な成果を陸続と発表してこられた研究者である。その前著『中世寺院社会の研究』（思文閣出版、二〇〇一年。以下前著と呼称）は、中世比叡山を代表する存在である「山徒」の動向や、「惣寺」としての延暦寺の組織構造、門跡組織の位置づけなどを綿密に論じた好著であった。その続編ともいえる本書は、前著で展開された緻密な研究方法はそのままに、分析対象の地域性や歴史的な段階差がより意識された内容となっている。

まず、第一篇「衆徒と閉籠」は、山門における「惣寺」の内容を、「山訴」（山門衆徒が行った様々な示威行動）の実施過程をもとに検討している。第一章では「山訴」の一形態である「閉籠」の実態を、鎌倉後期を中心に考察する。第二章では、室町期に実施された「山訴」の政治的・社会的影響を論じる。第三章では、園城寺・延暦寺における寺僧の身分構成とその特徴を分析している。そして、補論として園城寺に伝来した「智証大師関係文書典籍」の伝来経緯が考察される。

第二篇「坂本の馬借」は、山門と密接な関係にある「民衆」近江国坂本の住人を扱う。第一章では、坂本に住む「在地人」を手がかりに、中世坂本の景観復元が行われる。第二章は、応仁二年（一四六八）に発生した「堅田大責」をもとに、山門衆徒と馬借の「緊張関係」が、同じ日吉の神々を産土神とする新旧二つの集団の存在形態の違いに起因することを指摘する。第三章では、計三度にわたる坂本の馬借蜂起が検討され、彼らが山門を介さず直接幕府に嗷訴を行う一方、自らを日吉社の神威を帯びた存在と認識していたこと、さらにその蜂起が次第に土一揆の発生とも深く関係してゆくことなどが論じられる。

第三篇「山門と日吉社」では、日吉神人と、これとは別個に存在した大津神人の存在形態の差異を踏まえ、彼らと山門衆徒との関係が論じられる。第一章では一一世紀後半以降、「粟御供」を日吉社に貢進していた大津神人が、「京都の入神人」の出現や、「山門神人」たる粟津商人による「粟御料」の備進開始を受け、御供貢進から撤退してゆく経緯が論じられる。第二章では、鎌倉期以降日吉社への支配を強化した山門が、古来の由緒と無関係に「日吉社諸社名を冠した神人」や「山門神人」を補任していたことを明らかにする。第三章では、前の二つの章を踏まえ、日吉社と延暦寺で別個に行われていた金融活動が、「山門気風の土倉」として山門衆徒の支配下に編成される過程を詳述する。

第四篇「中世都市・京都の変容」は、中世京都を舞台に、そこに暮らす「民衆」と山門勢力との関係を扱う。第一章は応仁・文明の乱がもたらした山門衆徒・室町幕府の相互関係の変化を論じる。第二・三章では下坂氏が得意とする絵画資料分析によって、中世京都の景観の変遷と、その背後にある人々の心性や生活実態が析出される。

そして最後に、山科家と法住寺の密接な関係を指摘する論考、慶長～元和期に京都

上賀茂社社司が記した史料の翻刻と紹介を載せた付篇が配されたのち、全体が総括される。

以上に示されるように、前著以来追究されてきた山門の内部構造論を基礎として、坂本・大津・京都などの地域分析が展開されている点には、著者の研究視角のさらなる拡がりが看取される。さらに、個々の実証的成果に、都市史・社会経済史・宗教史・身分論など多分野に示唆を与える指摘がいくつも含まれている点も、特筆すべき魅力のひとつといえよう。

また、本書は中世の社会通念とされる「王法仏法相依論」の展開を大きな軸として構成されている点も大きな特徴である。例えば、山訴の展開と室町幕府の対応をかかる理念の相克として描く手法は実に鮮やかであるが、かかる理念の下で描きうる空間的・歴史的範囲については今後議論を呼ぶことも予想される。とはいえ、著者の研究成果により、中世における宗教勢力と政治権力の関係性や、京都とその周辺地域の実態などの分析が大幅に進展した事実は疑いようがない。本書が、今後も進展をみせるであろうそれらの研究の重要な指針となることは間違いあるまい。

（A5判　四三二頁　二〇一四年一一月　思文閣出版　税別七五〇〇円）

（松井直人　京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

受贈誌

（二〇一五年一〇月二日～二〇一五年一〇月九日）

立命館文學（立命館大学人文学会）六四三

九州国際大学教養研究（九州国際大学教養学会）二二―一

古代文化（古代學協會）六七―二

須坂市域の史料目録（須坂市誌編さん室）七

史観（早稲田大学史学会）一七三

編集後記

戦後七〇年の二〇一五年は、「都構想」や安保法案、海外の戦争・テロなど、政治・民主主義・平和などについて考えさせられることが多い一年だったように思います。私個人としては、そのほかに火山活動の印象が強く残る一年でしたが、みなさまにとっては、どのような一年だったでしょうか。

『史林』も、何とか論説三本・書評二本・紹介一本を得、やっと二〇一五年最終号の刊行に、たどりつくことができました。これも原稿をお寄せいただいた方々や、査読に御協力いただいた方々をはじめとする、みなさまのおかげです。深く御礼申し上げます。『史林』のこの一年のあゆみについては、巻末の総目次を御覧いただければと思います。

明けて二〇一六年が、会員・読者のみなさまにとって有意義な一年となりますよう、お祈り申し上げます。

（山田徹）

◆史学研究会ホームページ・アドレス

http://www.shigakukenkyukai.jp/index.html

二〇一五年一一月二五日印刷
二〇一五年一一月三〇日発行　定価一、二〇〇円
史林　第九八巻第六号（通巻第五一四号）
京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科内
電話　FAX（〇七五）七五三―二七八七
発行人　史学研究会
振替京都〇一〇七〇―二―五一五五番
理事長　永井和
印刷所　京都市南区上鳥羽藁田二九　中村印刷株式会社